

[翻 訳]

『スペクテイター』(5)

——第36号から第45号——

門 田 俊 夫

第36号 1711年4月11日(水曜日)

【スティール】

醜い怪物に耐える。(ウェルギリウス)¹⁾

本日は、私の意見は何も述べず、早速、劇場から届いた嘆願の手紙を公表したいと考えます。そして、それに関連する私の覚書を付け加えておきたいと思います。

ドゥルーリー・レイン、4月9日²⁾

先日貴紙に掲載されていましたがシティーおよびウェストミンスター市内で一般公開されている雄牛、熊、象、ライオンならびに貴殿が述べておられる奇観、ショー、怪物をすべて縁組みさせるという企画³⁾を読みまして、私たち当劇場の主だった役者たちは、その構想について協議致しました。私たちはこの企画が実行に移されることを大いに期待しています。私たちは、その一助となるために、劇場に出没している亡霊たちにはどこか別の場所で生計を得る手だてを考えてもらい、今月16日の夜明けを最後に、私たちの前には姿をあらわさないように警告を発します。私たちはこれを機会に、人道にかなった生活の描写に寄与しないものとはすべて手を切ることになりました。そこで、生きている道具はすべて無料で貴紙の企画家に提供することにします。貴殿が以前述べておられた「掛け布」はいなくなりました。「椅子のセット」⁴⁾も同様です。その椅子が今朝2時に二本足で居酒屋ローズに入っていくのを見掛けました。従いまして、私たちは、貴殿から町の皆さんに、私たちが規定作成に向けて努力している旨をお伝え下さるよう希望します。今後は、私たちは怪物ではなく、勤勉さと熱意で怪物に変わった人だけをお見せする積りです。今夜当劇場に来て戴けますと、上流社会の間で流行しています不自然な外観をお見せするのに私が努力

1) 『アイネーイス』3.583-4.

2) 手紙の内容は第31号および第22号のことに触れているので、日付は明らかに誤りだろう。グレゴリー・スミスは手紙の差出人を役者のトマス・ドゲット(c.1670-1721)と推定している。

3) 第31号参照。

4) 第22号参照。

しているのがお分かり戴けることでしょう。私は、ダンスをする貴婦人の役に扮して、物腰でしばしば優美だと考えられていることがどれほど歪んでいるかをお見せします。そうです、これは私たちが常設の劇場で目につく怪物をあばく手段の一例なのです。観客の皆さんが、今後は、粗悪なものは何一つお認めにならないよう、私たちは切望します。私たちは劇場の衛兵三名を解雇しました。そこで、今後、王には護衛兵をつけずに恋をさせ、会議をさせることになります。そして、ポールス王に援軍を送るか、マケドニア軍に合流させるかは、貴殿の指示を待ちます。ペンケスマン氏⁵⁾はデルポイの神託に対抗して異教の神々の神殿にお伺いをかけることにし、彼が扮するポールス王の運命の流れを変えることに疑いを差し挟みません。私は劇場の一同から、貴殿に、自分たちは貴殿の判断に従う旨伝えておいて欲しいと依頼されました。もし、貴殿のお力によって劇場から怪物を一掃できましたら、私たちはかつてのヘラクレス⁶⁾以上に貴殿を崇敬します。つまり、征服するよりも納得させることの方が難しいので、貴殿の手柄の方がヘラクレスの手柄より大だと考える次第なのです。

敬具

T.D.

拝啓

波乱に富んだ小生の運命の浮沈を貴殿にお知らせいたしますと、貴殿の同情と好意を獲得するのは間違いのないものと思われまふ。小生は、これまで長年にわたって、劇場で「雷」の役を務めてまいりました。私は劇場ではこれまでの前任者に負けないくらい雲間から大声を張り上げただけでなく、『リハーサル』⁷⁾では大胆な雷として、舞台上に降りてきて口もききました。ところが、彼らは小生を意気消沈させたいと、さらに格下げし、亡霊にするのが相応しいと考えたのです。このふた冬というもの、小生は亡霊に甘んじてきましたが、彼らはさらに横暴を極め、小生を地上から追放しただけでは満ち足りず、彼らの領土から完全に立ち去らせ、私から地下の仕事までも取り上げてしまったのです。そこでお願いですが、貴殿の仕事請負人が、ほかの作家はそうしているのですが、アレキサンダーの時代に小火器の使用が相応しいとお考えなら、小生はポールスにはむかう「小火器」の役をこなすことができます。でなければ、ペルセポリス炎上の場面あるいは貴殿が相応しいとお考えの何か別の役を提供して戴きたいものです。

コヴェント・ガーデンのサルモーネウスより⁸⁾

5) 第31号参照。

6) 第28号では、不死を得るために12の難業を遂行したヘラクレスと比較している。

7) 『リハーサル』(1665)は1月29日ドゥルーリー・レイン劇場で上演され、雷役をジョンソンが務めた。

8) サルモーネウスはアイオロスの息子で、ゼウスの火とオリンポスの雷を真似たため、厳罰が与えられた(『アイネーイス』6.585-6.)。

自分と家族のために思って行われる劇場に巣食う難物からの嘆願。劇場からの難物の追放を説く手紙。善良な生活を送っているとの証明。救済の要請。この嘆願の価値は、彼らを難物にしたクリストファー・リッチ氏⁹⁾にその起源があった。『アレキサンダー』の長征で先遣隊を指揮したいと『ハムレット』の「墓掘り人」¹⁰⁾からの嘆願。〈嘆願承諾〉。大王ペンケスマンに対してヘフェスチョン役をやりたいとするウィリアム・ブロック¹¹⁾の嘆願。〈嘆願承諾〉。

広 告

該当の女性は、父方、母方いずれの血筋からみても育ちが良い未亡人なり。かつての高名な弁護士トマス・プレーターと我が国でつとに有名な一族の一員レティーシャ・タトルの娘なり。その後、逆境に見舞われ、余儀なく何名かの貴族に仕え、いっとき女子寄宿学校の教師も務めた経験あり。その彼女がこの度、環境に恵まれたフィールズ近くのブルームズベリー・スクウェアに居を構え、オウム、ムクドリ、カササギといったおしゃべりな鳥たちに人間のことばを完璧に教え込むとのこと。鳥には、ことばを明瞭にきちんとした口調で語らせるだけでなく、きれいかつ流暢に、また、今日、茶会や接客日¹²⁾に使用されている当世風の言い回しや挨拶までも教示するとのこと。美声の持ち主には最新版のオペラのアリアを歌わせることも可能なり、また、必要とあれば、通常料金にいくばくかの割増料金を戴ければ、イタリア語ないしフランス語の教授も可能なり。パトロンが全額支払えない場合には、通学の途もあり。彼女は人々の気晴らしおよび劇場の魅惑的な森での活躍を志す鳥たちを相手にするということ。彼女がこれまで関心を払って観察しているところによれば、こういったあどけない鳥たちにあまりにも無作法な教育が施され過ぎているとのこと。これはひとつには鳥たちが街路に面したところに置かれるためであり、純潔できゃしゃな耳は大いに被害を受け、通行人や怠け者たちの淫らなことばや鼻持ちならない歌や下品な表現、さらには、魚売りやカードマッチ売り¹³⁾のことばなど恵まれたパトロンのある鳥には無用のことを覚えるとのこと。そういう次第なので、彼女は鳥たちの住まいを上記自宅の奥まったこざっぱりとした一室に確保しているとのこと。部屋には、自分と鳥のえさやりと鳥かご掃除の係の耳が聞こえず口のきけないお手伝い以外には入らないとのこと。これは彼女の長年にわた

9) クリストファー・リッチについては、第5号参照。

10) 3月24日のドゥルレー・レイン劇場では、ジョンソンが墓掘り人の役を務めた。

11) ウィリアム・ブロックは4月2日の『伊達男の策略』ではボニフェイス役、4月5日の『マクベス』では魔女役を務めた。主にどたばた喜劇のマイナーな役柄が多かった。この週は『傷ついた恋、またの名を婦人の満足』のサー・ブッキッシュ・アウトサイドを演じていた。昨年夏6月5日と6日には、ペンケスマン劇場で、『好敵手女王』のヘフェスチョン役を務めた。ブロックには息子が三人(クリストファー、ヒルデブランド、ウィリアム)おり、全員役者だった。ここで言っているのは息子のウィリアムのことだろう。

12) 第24号参照。

13) うなぎ、サバ、ひらめなどの行商人については、マーセラス・ラルーンの『シティーにおける呼び売り』が詳しい。第2号にカードマッチを売る若い娘のことが言及されている。カードマッチとはカードに硫黄を浸したものの。

る経験から、口がきける人にとっては沈黙を守ることがとても難しいこと、そしてまた、生徒たちががさつな音声や洗練されていない言葉づかいに強烈な影響を受けてしまい、危険にさらされるからとの配慮なり。要するに、鳥たちに少しでもその能力があれば、彼女は一年あればこの種のものから自分たちの友と仲間を持ちたいと考えているご婦人方の相手が出来るとのに相応しい会話力がつくように教示することのこと。

第37号 1711年4月12日（木曜日）

【アディソン】

糸つむぎのやり方は仕込まれていなく、機織りにかけては未熟。（ウェルギリウス）¹⁾

数ヶ月前、田舎にいる友人のサー・ロジャーが、私がここではレオノーラと呼ぶある婦人宛ての手紙を同封してきました。大切なことが書かれているので、私の手から彼女に渡して欲しいとの希望でした。そこで、私は今朝かなり早い時刻に彼女の家を訪問しました。そのため、彼女から支度が出来るまで書斎で待っていて欲しいと言われました。婦人の書斎と聞いて、私はとても好奇心をそそられました。そして、ご婦人が現れるまでかなり時間がありましたので、私は実に見事に整理されているとても豊富な蔵書をじっくり眺めるチャンスに恵まれました。美しい装丁で金箔が施された二折本の端には、とても見事な中国製の大きな壺が置かれていました。四折本はとても楽しいピラミッド状になったさきほどの壺より小型の器を積み重ねて八折本と仕切られていました。八折本はいろいろな形、色、大きさの紅茶皿で区切られていました。お皿は実に見事な彫刻が施され、ふんだんな染料で色付けされた一連の柱に見えるように木製の枠組に配置されていました。書斎で、戯曲、パンフレット、その他書類が置かれている箇所は、四角形になっており、私がこれまでに目にした最も素敵なグロテスク作品²⁾からなっており、スカラムッチア、ライオン、猿、マンダリンミカン、木、貝殻、その他様々な風変わりな陶磁器の図案が並んでいました。書斎の中央には小さな漆のテーブル³⁾がありました。そのテーブルの上には一帖の金箔が施された紙があり、紙の上には小さな本の形の銀色のかぎタバコ入れ⁴⁾が載っていました。書棚の上段には木に刻み込まれたまがいものの本が数種類並んでいました。それはちょうど連隊の臨時要員と同じで、単に書棚の埋め草にしているのです。私はそういった様々な調度品に心から満

1) 『アイネーイス』7.805-6.

2) グロテスクとは、人、動物、植物の空想的な形象を組み合せた装飾的芸術様式。

3) 原文では a little Japan Table. OEDによると、Japan が漆の意味で使用された最初のものは、japan cabinettsで、1681年のこと。ちなみに日本の国の初出は、1577年の Eden & Willis (title) The History of Travayle in the West and East Indies, and other countreys.. as Moscovia, Persia,... China in Cathayo and Giapan.

4) かぎタバコについては、ヒュー・マコーズランドの『かぎタバコとかぎタバコ入れ』（1951）が詳しい。

足しました。それはそのご婦人および学識のある人双方にとっても相応しいものと思えました。そこで、私は最初は美しく飾られた岩屋にいるのか書斎にいるのか分からないほどだったのです。

本にざっと目を通していて、そこにある書物は婦人が自分で読むために購入したものもかなりありますが、大半は彼女が評判を聞いたことがあるかまたは彼女自身著者に出会ったことがあるかのいずれかの理由から収集されているのが分かりました。私の目にとまったものをいくつか挙げますと、つぎのものが記憶に残っています。オグルビー訳『ウェルギリウス』⁵⁾、ドライデン訳『ユヴェナリス』⁶⁾、『カサンドラ』⁷⁾、『クレオパトラ』⁸⁾、『アストリア』⁹⁾、『ニュートン著作集』¹⁰⁾、本の中ほどにピンを挟んである『キュロス大王』¹¹⁾、『ペンブルックのアルカディア』¹²⁾、紙切れが挟んであるロックの『人間悟性論』¹³⁾、『難解語辞典』¹⁴⁾、『つづり字教本』¹⁵⁾、シャーロックの『死について』¹⁶⁾、『結婚の15の楽しみ』¹⁷⁾、サー・ウィリアム・テンブルの『随筆集』¹⁸⁾、マルブラン

-
- 5) ウェルギリウスの作品は、ジョン・オグルビーによって、1649年、1650年、1654年に英訳された。
 - 6) ユヴェナリスおよびペルシウスの諷刺詩は、ドライデンによって英訳され、1693年に出版された。
 - 7) ラ・カルプルネードのロマンス『カサンドラ』は、もともと1642年から45年にかけて10巻本で出版された。部分訳は王政復古以前に出たが、1676年サー・チャールズ・コットレルが全訳した。また、1705年には別人数名による翻訳書も出版された。
 - 8) ラ・カアルプルネードの『クレオパトラ』は1647年に12巻本で出版された。いくつか英訳があるが、1652年のロバート・ラブデイのもの（第一部）が最もよく知られている。つぎの10年間に続編が翻訳され、王政復古後にも別の版が出た。
 - 9) オノレ・ドゥルフェの非常に影響力をもった牧歌的ロマンス。1607年から27年にかけて第五部まで、1633年に全編が出版された。部分訳は、1620年という早い時期に、ジョン・パイパーが行ない、全訳は1657年から8年にかけて3巻本として出版された。
 - 10) この頃までには、ニュートンの主要な著作は出版されていた。『プリンキピア』(1687)、『光学』(1704)、『普遍的算術』(1707)。
 - 11) マドレーヌ・ド・スキュデリのロマンスで1649年から53年にかけて10巻本で出版された。英訳は、1653年から55年にかけて、F.G.によってフォリオ版5冊で出版された。イギリスでは17世紀後半に、フランスのロマンス四作（『カサンドラ』『クレオパトラ』『キュロス大王』『クレリア』）がとてもてはやされた。サー・ウォルター・スコットによると、この流行はジョージ一世の治世(1714-27)まで続いたということである。
 - 12) サー・フィリップ・シドニーの作で、1590年に出版され、17世紀に再版が繰り返され、1674年には第13版となっていた。
 - 13) パタノスター・ロウ、ブラック・スワンのチャーチルが2巻本で出版した第6版。第16号に広告が出ている。
 - 14) ホーキン、ヤング等数多くあった。
 - 15) 1707年に出版された *Glossographia Anglicana Nova* のことと思えるが、1704年に初版の出たもっと一般的なコッカーの *English Dictionary*(1704)の可能性が高い。これについては、デウィット・スターンズ、ガートルード・ノイズの *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson, 1604-1755* (Chapel Hill, N.C., 1946) 参照。
 - 16) セントポール大寺院聖堂参事会長兼ミドルテンブル法学院主事ウィリアム・シャーロックの『実地に基づく死に関する講話』。この書は1689年に出版され、1705年には13版になっていた。アディソンは第289号で、この書の絶大な人気について触れ、これまでに書かれた中で最も説得力のあるものだと語っている。第513号でもこの書から引用されている。

シュ神父の『真理の探求』英訳本¹⁹⁾、小説類、『挨拶・手紙・会話用例集』²⁰⁾、カルペパーの『産婆術』²¹⁾、『婦人への接し方』²²⁾、赤皮の装丁で背表紙が金箔の数カ所に二つ折れが入っている韻文で書かれたダーフェイの『物語集』²³⁾、木版の古典作家物、エルゼヴィルの印刷した古典物²⁴⁾、あずまの二人の恋人の箇所が開いてある『シーリア』²⁵⁾、ベーカーの『年代記』²⁶⁾、『娘への助言』²⁷⁾、検索表のついた『ニュー・アタランティス』²⁸⁾、スティール氏の『クリスチャン・ヒーロー』、傍らにハンガリー・ウォーター²⁹⁾のピンを置いてある『祈禱書』、サシェヴェレル氏の『スピーチ』³⁰⁾、『フィールディングの裁判』³¹⁾、セネカの『道徳的書簡』³²⁾、テイラーの『神聖な生と死』³³⁾、フェルトの『カントリー・ダンス教本』³⁴⁾。

以上の書物およびその他数名の著者について手帳にメモをとったあたりで、レオノーラが入って来ました。私がサー・ロジャーからの手紙を差し出しますと、彼女はなんとも言えないほどしとやかに、「あの方お元気でいらっしゃればよろしいですわね」と言いました。私はおしゃべりは嫌ですので、「ええ」と返事をし、一、二度お辞儀をただけで立ち去りました。

レオノーラは以前は名だたる麗人でしたが、今でもとても素晴らしい女性です。彼女がご主人

-
- 17) 人気のあったフランス語の『結婚についての15の歓び』の英語版。
 - 18) 『随筆集』は1680年、1690年、1701年と三部出版された。
 - 19) 1694年にトマス・テイラーおよびソールトの英訳本がそれぞれ出版された。テイラー版は1700年に第2版が出た。
 - 20) さまざまな版があった。
 - 21) ニコラス・カルペパーの『産婆術』の出版は1651年。
 - 22) 著者はリチャード・アレストリーで1673年に出版され、その後、版を重ねた。
 - 23) トマス・ダーフェイの『悲劇的、喜劇的物語』の出版は1704年。
 - 24) エルゼヴィル家は1592年から1692年にかけて古典を出版したオランダの印刷者の一家。
 - 25) マドレーヌ・スキュテリ作で、1654年から60年にかけて10巻出版された。1655年から61年にかけて、デイヴィスとハヴァーズが英訳した。
 - 26) 1643年に出版された『イングランド国王年代記』はサー・ロジャーの愛読書でもあった。
 - 27) ハリファックス侯ジョージ・サヴィルのこの書は1688年に出版され、その後版を重ねた。
 - 28) マンレイ夫人のこの書はもともと1709年にイタリア語で2巻出版された。1710年春、スティールへの皮肉を込めた献辞を載せて第3巻が出版された。
 - 29) ワインとローズマリーとラベンダーの花を混ぜたもので、化粧品および薬として人気があった。1822年のチャールズ・リリー『イギリスの香料業者』22章に処方が載っている。
 - 30) 神学博士サシェヴェレルのこの書は1710年には少なくとも第6版となっていた。
 - 31) 『クリーブランド公爵夫人メアリ・ワズワースと結婚した罪を問われる：郷土ロバート・フィールディングの糾弾、裁判、有罪判決』は1707/8、『デイリー・クーラント』紙2月20日に「出版なる」との広告が掲載された。当時センセーションを呼んだこの裁判は1706年12月オールドベイリー（中央刑事裁判所）で判決が下された。
 - 32) サー・ロジャー・レストレインジによって「要約」の形で1678年に出版され版を重ねた。
 - 33) 聖職者エドワード・テイラー（c.1645-1729）の『神聖な生活の通則と修練』（1650）、『神聖な死の通則と修練』（1651）は版を重ねた。
 - 34) ダンス教師フェルトの『ダンスの基礎』。フェルトはソーホー、コンプトン・ストリート等でダンス教室を開いていた。

を亡くして二、三年になりますが、最初の結婚が恵まれませんでしたので、再婚する決心がつかないのです。彼女には子供がいませんので、地所の管理を私の善良な友人サー・ロジャーに委ねている訳です。精神というものは何かお気に入りの楽しみや営みにかきたてられない限り、本来一種の無気力状態に陥り眠ってしまいますので、レオノーラは女性としての情熱をすべて書物への愛着と隠棲に振り向けているのです。彼女はしばしば自分で口にはしているのですが、話相手はもっぱら男性ということです。でもそれは彼らの著述を通してのことなのです。また、サー・ロジャー以外には男性の訪問客もごくまれです。サー・ロジャーの言うことにはとても楽しそうに耳を傾け、またスキャンダルにもなりません。読書はロマンス物がほとんどですので、彼女は独特の考え方をするようになっており、その傾向は家や庭、調度品にまで現れています。サー・ロジャーは、ロンドンから百マイルほど離れた荒れ野のようなところにあり、小さな魔法の宮殿のように見える彼女の田舎の邸宅の様子を語って一時間私を楽しませてくれます。岩はスイカズラとジャスミンに覆われた人工の岩屋に変っています。森には日陰の遊歩道があり、あずまやまでジグザクに進んでおり、キジバトのかごがいっぱいあります。泉が小石の間を流れるように作られており、サラサラととても心地よい音を立てています。そのうえ、泉は美しい湖へと流れ込みます。そこには二羽の白鳥がいます。そして湖の水は緑の牧草地を流れる小川に繋がっています。その小川は一族の者には「サラサラ川」という名で知られています。サー・ロジャーはまたこのご婦人は猟鳥類をその地方の紳士の誰よりも大切に保護しているのだと私に語ります。サー・ロジャーが語るには、それは彼女がヒバリや夜鳴鶯と同じようにウズラやキジを大切にしているからではないそうです。彼女が言うには、自分の地所で鳥が殺されると調和を乱すことになり、翌年はきっとその鳥がいないことを寂しく思うからだということです。

私はこのご婦人が学識によって非常に奇妙な向上の仕方をしているのを思うとき、称賛と憐憫の入り交じった気持で彼女を見ることになります。流行してはいるがさほど理性的とは言えない気晴らしに身をやつしている女性に比べると、自分で身につけた罪のない楽しみに包まれている彼女は非常に貴重な存在です。もし書物の影響を受けやすい女性が、単なる気晴らしではなくもう少しましな悟性を啓発し激情を取り除く傾向を備えた書物が与えられていたとしたら、どれだけ向上していたことでしょう。

しかし、婦人にとっての有益な読書方法については、別の機会に譲ることとします。そのときには、女性の向上にとって相応しい特定の書物を推薦する積りです。この件はとても微妙な問題ですので、我が寄稿者の方々からご意見をお寄せ戴きたいものと思います。

第38号 1711年4月13日(金曜日)

【スティール】

1)『エピグラム』6.29.8.

あまり喜んだふりをしてはならない。(マルティアリス)¹⁾

最近ある集まりに参加して、女性の申し分のない美貌と男性の申し分のない知性が、単なる気取り²⁾のために、それぞれ醜さと愚かさになるのを観察することになりました。自分の視線、言葉、身振りのひとつひとつに好印象を与えるのだという思いが、女性には染み付いていました。紳士の方も、その婦人が自分の美しさに対するのと同じくらい、自分の申し分のない資質に対してそれを十分に発揮することに熱心でした。つまり、男性は女性をもてなそうとして何か非凡なこと、いわゆる、気のきいたことを口にしようとしてきゅうきゅうしており、女性は女性で男性の気を引こうとして、実に様々な気取った態度を取るのです。彼女が笑うと、口が通常よりも大きくあき、歯が見えました。扇は少し体から離れすぎ、丸々とした二の腕が見えました。彼女は目にするものを誤解し、たじろぎ、自分の愚かさを笑い、すっかり落ち着きを失うのです。そのため、胸元はあわらになり、えり飾りを直さなくてはなりません。そして、彼女にはこれまでにない雰囲気と態度が漂うことになります。彼女がこういった状態のときに、洒落者は彼女につきぎに語り掛ける何か愉快的ことを考え出したり、彼女の虚栄心をくすぐるために誰か別の婦人についてよからぬことを口にしたりすることになります。こういった思わしくない気取りを見ていて、当然のように、私は一般にほとんどの人たちの振る舞いを色褪せさせることになるあの不思議な精神状態を垣間見ることになりました。

学識のあるバーネット博士³⁾は、『現世論』の中で、あらゆる思考は意識と表示が伴うと述べています。精神それ自体は何も呈示しませんが、直ちに内省つまり意識が追随し、提出されることが奥ゆかしいことか見苦しいことか教えてくれます。こういった精神行為はきちんとした振る舞いを通じて身振りに明らかにされます。意識はその時の思考あるいは行為の推移それ自体の手引きはしますが、それ以上には介入せず、再考の入り込む余地がない場合があります。そのようなときには、意識はあまりにも盲目的に自己の考えを是認する方向に働いている訳です。そういった意識のことを気取りといいます。

立派な行いをしようとする強い動機として、私たちの胸中には誉められたいという気持が植え付けられていますので、どちらでもよいことに対しても、その気持をもたない訳にはいかなくなります。自分たちは愛され称賛されるものだという意識に凝り固まっている女性は、絶えず表情や身のこなしを変え、自分たちを見ている人たちに別の美しさを印象づけようとします。女性と同様に愚かなことに気を取られている男性の服装も、タイはきちんと結ばれているか、帽子のかぶり方はきびきびとしているか、コートは大丈夫かなどといった点を意識し落ち着かないのです。こういった男性たちもしきりに注目されようとしている訳です。

2) 「気取り」は、スティールお気に入りのテーマ。

3) トマス・バーネットの *Telluris theoria sacra* (『現世論』) は1681年と1689年に2巻本として出版され、1684年と1690年に英語版が出た。

ところで、明らかに間違った意識から生まれるこういった気取りは、いい加減で取るに足らない心の持ち主にはいぶかしがられることはありません。だが、この気取りが貴顕紳士淑女に見られる場合には、ある種の憤りを覚える一方で嘆かわしく思わざるを得ません。気取りというものは、洒落者だけでなく、聡明な人たちの心にも入り込むものなのです。分別のある人が称賛を心待ちにしており、しきりに誉められたがっているのが分かったときには、畏を仕掛けて少しお世辞を言ってごらん下さい。その人はお世辞でもいいように解釈します。この弱点は誰にでもあります。自分にこの弱点があるかどうかは誰にも分からないのです。こういった称賛を受けたいという軽薄な気持を避ける最善の方法は、本来称賛に値しない場合には、細心の注意をしてその気持を払拭するしかありません。うわべだけのことには称賛を望まないことが大切です。この種のものには、容貌の魅力や服装、立居振る舞いなどが該当します。こういったものは意識しなくても自然に人を引きつけことになり、称賛を得ようとすればするだけ、魅力がなくなるものなのです。

私たちの意識が人生の主目的に向けられ、仕事あるいは楽しみの主目的について考えるときには、気取りが顔をのぞかせることはありません。なぜなら、気取ことは出来ないからです。だが、称賛に対する情熱を勝手気ままにさせとくと、些細なことの仕上げを楽しみにしてしまい、卓越した美德や立派な素養に対して当然受けるべき称賛を受けられなくなってしまいます。無関心であるべきなのですが、そうできないために、とても多くの素晴らしいスピーチや誠実な行為がふいにされています。人々は話し方、行動の仕方に関して重圧を受けます。つまり、どうすべきか、また、何を語るべきかに考えを傾注しなくなります。そしてそうやって素晴らしいことを行う能力を葬ってしまい、どうしてもよいことの失敗を恐れるのです。おそらく、これは気取りとは呼べないでしょうが、取るに足らないことであやまちを犯すのを恐れて、それを行うのがとても楽しいのだと主張する点では、少なくともある程度気取りがあるのです。

これはひとえに、人は称賛に値するほど十分に行動できるのだという点で、自分を完全に無視することから生じます。心は考慮中の一点に集中しますので、あやまちを犯しません。なぜなら、その意向からはずれることのあやまちについては何も考えないからです。

手におえない気取りは最も洗練されているはずのところでも顔をだし、注意してみますといたるところで目にとまります。気取ると、会話だけでなく前もって熟慮されたスピーチでも無礼なことばが飛び出すことになります。弁護士がしゃべる内容は余分なものをすべて排除するのが本分である法廷では、法律そのものから生まれる若干の不公平さもさることながら、気取りが裁判官を苦しめます。私はある人物が気取っていたために裁判官の前に立ったとき論点がずれてしまったのを見たことがあります。この裁判官⁴⁾は法廷では非常に緻密で論理的な弁護士であり、雄

4) ニコルズによると、これは大法官カウパーへの敬意と思われるとのことである。当時ウィンガム男爵ウィリアム・カウパー卿はトーリーが政権に就いていた1707年5月から1710年9月まで大法官を務めた。

弁なのですが、余分なことは一言も口にしなかったのです。

気取りは世俗世界で生まれるものですが、おうおうにして説教壇⁵⁾にまで登っていくことがあります。神聖な場所で、弁士の牧師はたびたびお門違いにも才覚におぼれ、最後の審判について数多くの巧妙な言い回しを交えて説明するために、みんなからかいのことばが分からずに、罪を犯さないよう決意しなくてはなりません。それどころか、彼が口にする偉大なる真実についてのお祈りの最中に、ときどき、とても巧みに表現されたことばをつかってかしこまり、彼自身が取るに足らぬ存在であることについて非常に適切に話し出すため、腰の低さから彼がすてきな紳士であるといった雰囲気が醸し出されるのを目にすることができます。

最後に、いま述べています欠陥にむしばまれていますある聡明な人物に宛てて先日私が書きました短い手紙を載せておきます。

拝啓

先日、あなたと一時を過ごしましたが、あなたのことばや行動に見られる耐え難い気取りについて、友人として助言しておかなくてはなりません。私がそのことを少しほのめかしましたら、あなたは友人たちが自分のことをどう考えているかについて人は冷静でいられるかと私に尋ねました。それはその通りです。でも、常に称賛を慰みとしてはなりません。称賛を望む人は、人生の相応しい時期まであるいは亡くなるそのときまで、それを見合わせる事が出来なくては駄目です。もしあなたが称賛に値するというよりむしろ誉められたいとなれば、些細な長所は軽蔑しなさい。そして、誰にでも面と向かってあなたのことを称賛するほどなれなくささせてはいけません。こうすることであなたの虚栄はその糧を必要とするでしょう。同時に、あなたの尊重されたいという情熱は、以前にもまして十分満たされることでしょう。人々はあなたを称賛している様子を所作で示すことでしょう。賛辞を一回受けることで、あなたは二十回の丁寧なことばを受けることになります。そのときまで、あなたは賛辞も丁寧なことばも見合わせておくことが肝要です。

敬具

第39号 1711年4月14日（土曜日）

【アディソン】

気難しい詩人たちの気持を和らげ、彼らの怒りを鎮めるために、

私は幾多のことを忍ぶ。なぜなら、私は自分のことを記すのですから。(ホラティウス)¹⁾

申し分のない悲劇²⁾は人類の最も崇高な所産ですので、この上なく楽しくかつためになる楽し

5) トマス・ポープ・ブラウント『作詩法について』(1694) 参照。

1) 『書簡詩』2.2.102-3.

みを提供することが出来ます。セネカが語るには³⁾、逆境と苦闘している有徳の士は、神が満足して見つめる光景なのです。そして、その喜びは優れた悲劇で経験する喜びでもあります。この種の気晴らしは私たちの思考からあさましくつまらないことを取り除いてくれます。これは私たちの装飾である人間性を育み啓発します。すなわち、尊大さを緩和し、苦痛を和らげ、神の摂理に従わせるのです。

そのため、洗練された国ではどこでも、この種の戯曲が人々の励みとなっているのは驚くに足りません。

今日の悲劇は、筋立ての複雑さとはこびという点では、ギリシャ・ローマ悲劇を凌いでいます。だが、信仰心に厚い作家が認めるのをためらっているのですが、倫理的な点では、ギリシャ・ローマ悲劇にはるかに及びません。

この点に関してはいずれもっと詳しく説明しますが、本日の紙面および後日の紙面では、我が国の悲劇の向上に多少とも貢献できますように、当然のように異議が出ると思われるいくつかの点について寸評を加えたいと考えます。

アリストテレスは、ギリシャ語の短長格の詩行が悲劇にとって最も相応しいのだと述べています。⁴⁾なぜなら、短長格は散文の語法を取り上げると同時に、他の詩行よりもさらに一步その語法に接近するからです。アリストテレスによれば、普通の話をしているときには、人々は無意識の内に始終短長格でしゃべっているということです。英語の無韻詩⁵⁾についても同じことが言えます。意識しないのですが、無韻詩は私たちの通常の話に入り込んでおり、悲劇に見事に適応すると思われるほど韻文と散文を繋ぐ媒体となっています。それゆえ、私は韻文の戯曲を見るととても気分を悪くします。ギリシャ語やラテン語の六歩格で書かれた悲劇がそうであったように、英語では韻文は馬鹿げているのです。二つの別個の言語と考えられるのですが、ある場面が韻文で、またある場面が無韻詩で書かれている作品では、つまり、前後すべてが無韻詩でありながら、韻文でもったいをつけられた直喩が挿入されているような場合には、やはり破格が一層重要なのだと、私は思います。しかしながら、私は詩人の好みであれば、幕ごとに二、三の二行連句で悲劇の締めくくりをすることに対してはその妨げはしません。これは長いレチタティーヴォの後のイタリア・オペラの雰囲気と同じ効果を生み出し、役者に優雅な退場をもたらすかも知れないのです。そのほかに、昔の悲劇では、延々とした同じ声の抑揚に飽きさせないために、多様な韻律を配した箇所があります。これと同じ理由から、私は我が国の悲劇の台詞が不完全行で終わり、その直後にしゃべる人物が前行を埋めずに新しい行から始めても、気に障ることはありません。ま

2) アディソンはアリストテレスの『詩学』26にならっている。17世紀、特にフランスでは、一般に悲劇より叙事詩を高く評価した。

3) 『神意について』2.8-9.

4) 『詩学』4.14.

5) 悲劇における無韻詩については、17世紀にしばしば議論された。

た、そこで表現される情熱を満足させるものであれば、行の途中で間や中断があっても気にしません。

こういったテーマを扱っています以上、我が国の詩人たちは悲劇の情趣よりも様式の方が得意だと言っておかなくてはなりません。我が国の詩人たちが用いる言語は多くの場合崇高で堂々としていますが、思慮はとてもつまらないか陳腐です。これに反して、古代の悲劇やコルネイユやラシーヌ⁶⁾の悲劇では、表現も素晴らしいのですが、悲劇を支え、膨らませているのは思考力なのです。私自身は、表現の調子や勢いで駄目になってしまう俗悪な情趣よりも馴染みのことばで弱まってしまう崇高な情趣の方が気に入っています。我が国の悲劇のこういった欠陥が作家たちの才能や知識や経験の不足から生じるのか、それとも、情趣よりことばの鑑定者であり、そのため情趣よりことばを好む読者層の悪趣味への追従から生じるのかは、私には分かりません。しかし、作家が対話をすべて無韻詩にしないで、平易な英語で組み立てれば、そして、読者が一場面を精読して、悲劇の装飾がすべて剥ぎ取られてあらわになった台詞ひとつひとつの考えを熟考すれば、情趣、ことば双方の行状は改良されるものと思います。すなわち、こうすることで、私たちはことばに威圧されずに、思考を公平に判断し、台詞を口にする人物にとってそれが自然であるか際立っているか、雄弁の炎に包まれて輝くに値するのか、それとも我が国の悲劇作家たちがよく利用するものなのかを考えることが出来るのです。

つぎに、私たちの考えが偉大で公正であっても、それはしばしば大げさな言い回しや難解な隠喩⁷⁾やまとっている不自然な表現によって曖昧になってしまうのだと言っておかなくてはなりません。シェイクスピアはこの点ではしばしば大きなあやまちを犯しています。私はこれまで引用されているのを見掛けたことはありませんが、アリストテレス⁸⁾がこの点に関して卓抜な意見を述べています。アリストテレスによれば、筋立ての中で、解説、たとえ話、語りといった場面、つまり、人々の意見、素振り、情熱が描写されないいわゆる動きのない場面では、表現は細心の注意を払うべきだと言うことです。というのは、こういったもの、つまり、意見や素振りや情熱は大げさな言い回しをすれば曖昧になってしまう可能性があるからです。批評のお手本をほぼアリストテレスに依拠したホラティウスは、つぎの詩行を書くとき、上述の規則に気を配ったように思われます。

悲劇作家もまたじっと考え込み、悲嘆に暮れる。

追放され哀れなペーレウスとテーレポスは

感きわまり、高まり、ことばを失念する。⁹⁾

6) サン・エヴルモン「ラシーヌ悲劇論」参照。

7) ドライデンは『無垢であること』(1677)の序文で、「ウェルギリウスやホラティウスは最も厳しい時代の一語もおろそかにしない作家として、しばしばきわめて難解な比喻を用い、大胆な誇張をした」と述べている。

8) 『詩学』24.11.

9) 『詩の技法』95-98. ペーレウスとテーレポスはソフォクレスやエウリピデスの悲劇で扱われた王子。

我が国の現代の詩人たちの中で、リー¹⁰⁾ほど悲劇に向いていたものはいません。ただし、彼が才能の衝動にとらわれずに、それを抑制し、度を超えなかったらのことですが。つまり、彼の考えは実に悲劇に適しているのですが、しばしばことばの中に埋もれてしまい、その考えの美点が見えにくくなっているのです。要するに、彼の作品には無限の輝きはあるのですが、煙に巻かれてしまいその輝きは半分も見えてこない訳です。彼はしばしば情熱的な場面では成功していますが、力まず彼がふんだんに用いる形容辞や隠喩を差控えている箇所は特に成功しています。スタティーラがアレキサンダーの会話の魅力について語る台詞の一行ほど自然で心地よくまた情熱的なものはありません。

ああ、そのとき、彼は口を開きます。なんと素敵な話し方でしょう。¹¹⁾

行の途中の予期しない休止および話し方の描写を感嘆へと転じるその方法は言うに言えないほどあざやかでかつそれを語る優しい人物に見事に適合しています。このことばには、この上なく壮麗な表現よりも光彩を放つ明快さがあります。

オトウェイ¹²⁾は悲劇の言語では自然を手本としていますので、我が国の詩人の誰よりも情熱的な場面では異彩を放っています。彼の悲劇の筋には他の詩人よりも馴染みのかつ家庭的な点がありますので、華麗なところはほとんどありませんが、表現は素晴らしいものがあります。そのため、彼は傷つきやすく感傷的な場面では実に見事に成功していますが、ときどきそういった場面であまりにも陳腐な言い回しになることがあります。アリストテレスの規則では、そういった場面こそ荘重な表現を用いて奮い立たせ支えるべきだったのですが。

オトウェイの作品『安泰を保ったヴェニス』¹³⁾は構想があまりにもまずいために、最も重要な登場人物が謀反人や反逆者になっているのだと評されてきました。もし主人公が国を守るときに、破滅と滅亡に対して示したのと同じ善良さを見せていたとしたら、観客は彼に対してさほど同情も称賛も寄せることは出来なかったことでしょう。現在上演されているものを見ると、彼についてはただ、ローマの史家¹⁴⁾がカティリナについて語っているように、もし彼が国のために尽くしたのだったら、彼の没落は光り輝くものだったのだらうと言うしかありません。

第40号 1711年4月16日 (月曜日)

【アディソン】

たまたま、自分でやりたくないことをほかの人たちがうまくやっていると、

10) ナサニエル・リー (c.1649-92) は17世紀後半の有力な悲劇作家で、評価はドライデンと肩を並べていた。

11) 『好敵手女王』1幕1場。

12) トマス・オトウェイ (1652-85)。作品としては『アルキピアデス』(1675)、『孤児』(1680)、『安泰を保ったヴェニス』(1682) などがある。

13) 「カトリックの陰謀」を諷刺したもので、トーリーに人気があった。

14) ルーキウス・アナエウス・フロールス『梗概』2.12.

私が妬ましく思うと考えないで欲しいものです。私には、詩人というものは
危ない橋を渡ることが出来るのだと思います。彼らは取るに足らぬことで私の心を
苦しめ、燃え上がらせ、和らげます。そして、まるで魔術師のように私の心に
愚かな恐怖を植え付けるのです。また、あるときにはテーベにまたあるときには
アテネへと私を誘ってゆくのです。(ホラティウス)¹⁾

我が国の悲劇作家たちは、徳の高いあるいは無垢な人物が不幸に見舞われる場面を描くとき、
彼が苦難から脱け出するか、敵を打ち負かすまで、見捨てておいてはいけないという考えに取りつ
かれています。彼らの犯すこのあやまち、現代の批評の愚かな原則によって、作家には報いと
懲罰の均等な施し、つまり詩的正義の公平な執行の義務があるのだという考えを生み出していま
す。私はこの規則を誰が最初に打ち立てたのかは知りませんが、この規則は自然、理性、あるい
は古典作家の慣行のいずれにもその根拠はないものと確信しています。私たちは善と悪が一樣に
この世の人々全員の身の上に降りかかるのだということを承知しています。悲劇の主目的は観客
の心に憐憫と恐怖を起こさせることですので、美德と無垢を常に幸福かつ成功させると、この大
目的をくつがえすことになります。善良な人が悲劇の中心部でどれほど大きな苦難と失望を経験
しても、最終的に彼が希望通りになると分かっていると、私たちの心にはほんのささやかな印象
しか残さないでしょう。善良な人が深い苦悩に包まれるのを見ると、私たちは自分たち自身を慰
めることになります。なぜなら、彼が苦悩から脱け出すということ、そしてまたそのときの悲嘆
がたとえどれほど大きくても最終的には喜びに変わるのだということが確かだからです。このため
に、いにしへの悲劇作家たちは彼らの作品では登場人物を、彼らが依拠する物語のように、また
観客に心地よい影響を及ぼすように、美德をあるときには幸福に、またあるときには惨めにさせ
て、この世と同じように扱ったのです。アリストテレスはこういった種類の悲劇を考察し、幸福
な結末を迎える悲劇よりも、不幸な結末を迎える悲劇の方が、つねに人々を楽しませ、公開の演
劇論では賞をさらっていたのだと述べています。²⁾ 恐怖と憐憫は心に心地よい苦悶を残し、観客を
真剣で落ち着いた心的状態にさせます。それはささやかで束の間の喜びや満足感と比べてはるか
に持続力があり、同時に快適な状態なのです。それゆえ、我が国の悲劇のうちでは観客が感情移
入する登場人物が不幸から立ち直る作品より、不幸に陥る作品の方が成功しているのが分かりま
す。この種の最良の作品としては、『孤児』『安泰を保ったヴェニス』『アレキサンダー大王』『テ
オドシウス』『愛ゆえに』『オイディプス』『オルノーコ』『オセロ』などがあります。³⁾ シェイクス

1) 『書簡詩』2.1.208-13.

2) 『詩学』13.4-6.

3) 『テオドシウス』以外はすべて、この頃のドゥルーリー・レイン劇場の上演目録に入っていた。『孤
児』は2月27日に上演され、ブラッドショー夫人がモニミア役。『安泰を保ったヴェニス』の上演は
1月16日。『好敵手女王』と『テオドシウス』はリー作。ドライデンの『愛ゆえに』は1709年5月に

ピアの『リア王』⁴⁾もこの種の賞賛すべき作品ですが、詩的正義という妄想的な考えによって改作されていますので、私の考えでは魅力が半減しています。とはいえ、別の考えに基づき、幸福な結末を迎える悲劇にも大変見事な作品もあることを認めなくてはなりません。実際、上述の批評が始まってから書かれた優れた悲劇の大半はこの傾向を持っています。例えば、『喪に服した花嫁』⁵⁾『タメルラン』『ユリシーズ』『パイドラとヒッポリュトス』そしてドライデン氏の作品の大半がそうです。同時に、シェイクスピアの作品の多くや古典作家の名だたる悲劇の数篇もまたこの形になっているのだと認めない訳にはいきません。従って、私はこの種の悲劇に異論を差し挟むことはしませんが、これを唯一の方法としている批評には疑問を持ちます。すなわち、こういった批評が我が国の悲劇に大きくのしかかり、おそらくは、我が国の作家たちの才能を捻じ曲げているのです。

我が国の演劇が生み出した悲喜劇は、これまで詩人の考えの中に入り込んだ最も不自然なでっちあげのひとつです。陽気と悲哀が混ざり合った作品を書くくらいなら、アイネイアースとヒューディブラスの冒険をひとつの詩に織り込むことを考えた方がましでしょう。でも、こういった仕事の馬鹿馬鹿しさはあまりにも明白ですので、私はこれについては固執致しません。

悲喜劇に対する欠陥は、ダブルプロット（主筋と脇筋の二重の筋）を持つすべての悲劇にもある程度振り向けることが出来ます。ダブルプロットもまた我が国の舞台では他の国に比べて頻繁に見られることです。ダブルプロットに欠陥があるのは、上演において、観客の悲嘆は他の情熱に変わることはないのですが、別の対象に向けられ、中心となる行為への関心が薄れ、悲哀が別の回路に放り込まれて悲哀の流れが中断するからです。しかしながら、この欠陥は、主筋の完成に貢献し、同じ大団円で結末を迎えるように、脇筋を中心的な構想に関連づけ、巧みに配置することで、全面的とは言えないものの、かなり矯正することが可能です。

また、我が国の悲劇の欠点というか偽りの長所とみなされる点がもうひとつあります。つまり、一般に大言壮語と言われている台詞がそれに該当します。悲劇の中で激しく情熱的な場面は常に観客に興味をそそるものです。そのために、私たちは役者たちが激しい行為をしながら、作家が大きな気概を込めて書き、そう演じて欲しいと考えている場面を朗々と演じているのをよく見掛けます。私はパウエルがこの手管を駆使してわれんばかりの喝采を博しているのにしばしば出くわしたことがあります。この極意を知っている詩人たちは、しばしば、激情とは無縁のことばに

上演された。ドライデンとリーの合作『オイディプス』はベンクスマン劇場で1710年8月3日と31日に上演された。トマス・サザーン(1660-1746)の『オルノコ』は1710年12月9日と19日に、『オセロ』はバートン・ブース(c.1679-1733)が主役で1711年1月18日に、それぞれ上演された。

4) テートの改作版はパウエルがリア役で、1710年11月30日にドゥルーリー・レイン劇場にかかった。

5) コングリーヴ作『喪に服した花嫁』(1697)は、1710年1月18日にドゥルーリー・レイン劇場にかかった。『タメルラン』と『ユリシーズ』は共にニコラス・ロウ(1674-1718)の作品で、前者は1710年5月7日ドゥルーリー・レイン劇場で、1710年9月30日にはグリニッジのベンクスマン劇場で上演された。後者は1705年以来上演されていない。

激しさを添えたり真の激情を燃え上がらせて大げさなことばにすることによって、役者にそれに似合った感情を呼び起こさせる機会を与えています。このため、主人公の口には大言壮語が詰め込まれ、精神の崇高さというよりはむしろ誇張から生み出される情緒が漂うことになっています。不自然な叫び、呪い、誓い、冒瀆なことば、人間性の無視および神々に対する激越なことばは、観客からは高邁な考えとみなされ、しきりに限らない称賛を浴びている訳です。

私はここで、我が国の悲劇作家たちが悪用していると思われる点について付け加えておきたいと思います。我が主人公は一般に恋する人なので、彼らが舞台上で感情を高まらせ荒れ狂うことは、ご婦人方の観客にとって大層魅力的に映ります。男性がある場面では王を侮辱したり神々に立ち向かって行くかと思うと、別の場面では愛人の足元にひれ伏すのを見ると、ご婦人方はとても喜びます。主人公に男性には尊大に、女性には卑屈に振舞わせてご覧なさい、その人物は必ずやボックス席の人気者になることでしょう。ドライデンとリーは、いくつかの作品において、この秘訣をうまく実践に移しています。

しかし、静かに口にされる大言壮語が信じられないほど心地よいものであることを示すために、私は、読者に、『オイディプス』を見るときには、主人公が三幕の終わりで、つぎの台詞を口にして、実に静かに退場する様子を観察なさることをお勧めします。この台詞では、考えはごく自然で同情を誘うのは間違いありません。

私は、神々に向かって最後のお願いをし、私の美德を一掃し、
私の犯罪を暴き出します。

もし、私が盲目的に運命の迷路に紛れ込んでいるとしたら、
そして、私が避けようとした道に迷い込んでいるとしたら、
私の過ちは、神意のせいにして下さい。

罪を犯しているのは、私の手であって、心ではありません。

そして、彼が四幕の終わりで、不敬のことばと呪いのことばを口にしてわれんばかりの拍手を浴びながら退場するさまを見て下さい。観客が大変な苦しみと同時に喜びの気持ちに包まれているのを知って不思議に思うことでしょう。

ああ、アテネでたびたび見掛けた通りに、
(ところで、その地では『オイディプス』後長年にわたって
舞台はかからなかった。)
舞台が上り、大きな雲が降りてくれればよいのに。
そして今、実際に、私は目にするだろう。
この重々しい地球とあの大理石の天井が、
まるでジュピターの手のように、手を組み、人間をのみほすさまを。
暴風雨に巻き込んで。

パウエル氏は時々観客の悪趣味に乗じて喝采を博していると述べましたので、このさい、私は、彼を公平に評価して、彼は悲劇役者として一流だと認めなくてはなりません。そして、玄人筋から称賛を受けるに値するのだと言っておかなくてはなりません。今晚演じられるメキシコ征服では彼が称賛を受けるのは間違いないものと思われます。

第41号 1711年4月17日(火曜日)

【スティール】

知られざる面が暴露される。(オヴィディウス)¹⁾

女性というものはしばしば実際よりは奇麗に見えるということに気づいていなければ、私はつぎの手紙を書いてきた紳士に同情し、女性を攻撃することはないでしょう。礼節をわきまえた社会ではこういったかたりはあってはならないことなのです。私は、他の男性諸氏への警告として、この紳士の不幸を公表すべきと考えます。そして、男性諸氏には自分たちが愛慕するものをたえず吟味して戴きたいと思います。

拝啓

貴殿が博識の人だと考えますので、きわめて特異なケースについてお伺いをたてます。実は私は心底妻から逃げ出したいと考えているのです。私の事例を考えて下されば、私が離婚を願っているのが偽りではないことを貴殿に信じて戴けるものと思っています。私は道楽者に過ぎず、芝居を観る以外には、自己の向上を目指すことはほとんど何もしていません。『物言わぬ女』²⁾で、どちらであったかは忘れましたが、カットピアド博士かオター博士のどちらかが離婚の根拠のひとつに「ひと間違い」を挙げていたのを覚えています。つまり、結婚したとき、相手の女性が自分が考えていた女性ではなく、別の女性だと分かったときには離婚を申し立てる根拠となるという訳です。もし、法律でそうなっているのであれば、まさしく私の事例がそれに該当すると思います。というのは、観察者殿、貴殿は、結婚するまで、夫に自分の顔を見せない女性がいるということをご存知でしょうから。

貴殿に気をもませないために、単刀直入に言いますと、問題は化粧なのです。女性の中には、非常に化粧が上手で、結構な目元を作り上げる人がいます。彼女たちは胸、口元、頬それにまゆを入念に作り上げる訳です。私の妻はどうかといいますと、彼女の華麗な髪型は言うまでもなく、彼女の奇麗な額、首、腕に私ほど魅了される人はいませんでした。でも、私がとても驚いたことには、それらはすべて手を加えた結果だということが分かったのです。彼女の肌はたえず化粧を

1) 『変身物語』1.645-6.

2) ベン・ジョンソン『エピソード、またの名を物言わぬ女』(1609) 5幕3場(アーノルド版)。この作品はこの年3月5日にドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

しているせいでひどく変色しているため、朝起き掛けには、前夜私がベッドに連れて行った娘の母親とは思えないほどふけているのです。そんな訳で、もし彼女の父親が彼女の偽りではなく本物の面相に相応しいだけの持参金を用意しないのなら、私は機会さえあれば彼女と分かれる積りです。貴殿のお力によりまして、父親と彼女にこのことを知らせることにした次第です。

敬具

法律あるいはこのご婦人の両親が傷ついたこの紳士をどう扱うかは、私には分かりませんが、彼の言い分に大いに妥当性があると認めない訳にはいきません。実際、私は随分以前から、この悪弊を見てきましたし、素顔の女性と借り物の肌色をした女性を、ピクト人³⁾とイギリス人ということで識別してきました。どちらがどちらであるかを判断するにはたいした眼識は必要としません。イギリス人は生き生きとして活力に満ちた容貌ですが、ピクト人は、奇麗とは言えず、生氣がなく無知な顔つきなのです。本物の顔の筋肉は、優しい感情、突然の驚きで満たされ、心地よい狼狽で紅潮します。つまり、目の前の対象あるいは呈示される考えによって、心が動かされるままに変化するのです。だが、ピクト人はあらゆることを、それが喜ばしいことであれ悲しいことであれ、同じ表情で見ます。すなわち、どんな場合でも、同一の無感覚な表情となるのです。ピクト人は一生懸命恋人たちに言い寄られようとしませんが、ある一定の距離からは近づけないようにせざるを得ません。要するに、あまりにも近寄られると、思い焦がれる恋する人のため息で顔の造作が溶けてしまうのです。また、性急な人からキスされると、その女性の色が恋慕者に移ってしまうかも知れないのです。こういった偽りの女性⁴⁾について語ると、どうしても不躰なことを言わざるを得なくなってしまうのですが、彼女たちにはペンキ塗り立ての部屋に入ったときどんな感じか考えてみることをお勧めします。こういった化粧をしている婦人が近づくると随分不快だと確信するはずです。

ウィル・ハニコームはある日私たちにかつてのピクト人との珍しい体験談を披露してくれました。この婦人は美と知性をほしいままにし、ほかでもなくただ彼女への恋慕者たちの悩みをからかうのを目的として、相手の心を射止めるのを務めとしました。彼女は男性を誘惑するために巧みに言い寄りますが、刺激がなくなるとなんらためらうことなく急に関係を断つのでした。彼女のひねくれた性格や虚栄心のお陰で、我が友人に対してはいとも簡単に彼女の知性や会話の魅力が通じなくなりました。だが、彼女の美しい姿は、偽りと不実さによってそこなわれることなく、

3) ロバート・プロット『スタッフォードシャーの自然史』(1686)によると、「古代のブリトン人は体に大青の葉からとった青い染料を塗り付けており、長命であった。ここからピクト人つまり「彩色を施した人」という名が付いたと考える人たちがいる」ということである。カエサル『回想録』にも「体を青く塗っており、敵には不気味に見える」との記述がある。

4) スウィフトは1711年12月21日付けのステラへの手紙で「お産直後の婦人に会いましたが、化粧をしていなかったためこの上なく醜く蒼白で生氣がなく老けて陰気に見え、ひどく不快に思いました。でも、また化粧をして美しくなることでしょう」と記している。

日々彼にのしかかり、彼は彼女に会うたびに新たな魅力を感じました。彼女はウィルがどうしようもないほど彼女の虜になっているのに気づくと、彼を前述のようにあしらい始め、何度も残酷な仕打ちをして最終的には完全に追放したのです。みじめな恋する男は卑屈な書簡をしたためて自らの悲運を払いのけようとしたが無駄でした。そして、とうとう最後の手段としてメイドにかなりな額のお金を包まざるを得ませんでした。お金を貰ったメイドは彼を朝早く婦人の化粧室の掛け布の陰に手引きしました。彼は実に都合よく気づかれずに観察する体勢をとりました。このピクト人はその日に装う積りの顔づくりを始めます。彼が断言するには、彼女が当の女性であると分かるまでたっぷり半時間は化粧をしていたということです。彼はあれほど思い焦がれていた顔色の兆しが見え始めると直ぐに、姿を現すことにしました。そしてカウリーのつぎの詩を口にしました。

このように巧みに、飾り立てるあなたは
残忍なわざにはほかなりません。
まるで、矢に塗られた毒のように、
今にも殺めそうです。⁵⁾

このピクト人は化粧を終えた方の顔には可能な限りの可愛い作り笑い浮かべ、もう一方は蒼白のままで、この上なく狼狽して彼の前に立ちました。ハニコームは薬壺や化粧水を取り上げ、ハンカチに一杯になるほどのブラシやスペイン産ウール⁶⁾と軟膏の入った小瓶を押収しました。この婦人は田舎に引きこもり、恋する人は恋の病が直りました。

インチキへの誓いを守る必要がないことは確かですし、ピクト人との誓いそれ自体が無効なのです。それゆえ、私はイギリスのご婦人方全員にほかのご婦人と同じ事をなさらないようすすめます。また、私はリングミラ以外は正体を明らかにすべきだと考えています。というのは、彼女の顔色はあまりにも繊細なため、自然の傑作ではなく現存する最悪の作品を選んだ罰として、化粧することが認められているのです。女性にはなんの期待もせず、女性を単に種のひとつと考えている私としましては、分別のある女性の感情をそこなうのはさほど気になりません。従って、これまで長年にわたって公然とはなっていますが、決して姿を見せなかった顔をいくつか呈示します。私がこの化粧という慣習を破ったとき、数多くの女性が化粧を止めて、お忍びの素顔でいるのを目にするのは、劇場での大きな楽しみとなるでしょう。

ところで、女性が魅力を増すためのお手本としては、感じの良いスタティーラがいい例となります。彼女の目鼻立ちは快活な精神のお陰で活気づいていますし、陽気さのお陰で目には生気がみなぎっています。彼女は装わなくても優雅ですし、無頓着でも軽率には見えません。作為的なことをしようとは考えていませんので、彼女は容姿について何も望んでいないのです。

スタティーラはまさしくダン博士の愛しい人についての描写そのものであり、どう考えてもピ

5) 『愛しい人』『侍女』第4連。

6) 羊毛は染料で処理し、化粧品として使用された。

クト人には似つかわしくありません。

彼女の純粋で感銘を与える血が

頬に宿っていた。そして、はっきり物語っていた。

彼女そのものが思いを体現していると言えるほど。⁷⁾

広 告

年の頃19歳の淑女（最近死去したある貴族の娘）。実に入念に肌色の化粧をして、チャンスを待つ。ミンヒアの館では、グロテスク、そう、バービカンのオランダ人画家との噂あり。

[注] 彼女は身繕いも巧みで、フードとリボンが顔の色に実に上手く調和している。

第42号 1711年4月18日（水曜日）

【アディソン】

風が岸に打ち寄せる波を打ち砕いたり、木々に激しく打ちつけたり、

怪獣どもが咆哮をあげるときのように、

鮮やかで奇妙な衣裳を身にまとった役者が登場すると、

歓声が沸き上がり、派手なベストにやんやの喝采を送る。

ところで、役者は口を開いたのかね。まだ、一行も。

ならどうして拍手したのかね。ああ、服が素敵なのです。（ホラティウス）¹⁾

並みの悲劇作家はそれに相応しい感情や表現によるのではなく、衣裳や装飾によって、観客の恐怖と憐憫を誘おうとするのだ、とアリストテレスは述べています。²⁾我が国の演劇ではこの種のとても馬鹿げたことが行われています。作家が私たちに恐怖を起こさせたいと考えるときには、雷が鳴り、ふさぎ込ませたいときには、舞台が暗くなります。だが、我が国の悲劇的な技巧の中で私が最も不快感を覚えるのは、台詞を口にする人物の壮大な考えを私たちに吹き込もうとして利用する策です。一般的な主人公の創り方は、頭に巨大な羽飾りを載せるやり方です。この羽飾りはとても高くそびえたち、しばしば、顎から頭のとっぺんというより足の裏までの長さとなっています。偉大な人物はことごとく背が高いのだと思うくらいです。役者にとってこれは大いに邪魔になります。役者はしゃべっている間、首筋をじっと動かさずに固定しておかなくてはなりません。つまり、かりに愛しい人、国のこと、あるいは友人のことで不安があっても、彼の所作から、最大の関心事は羽飾りが頭上から落ちないようにすることなのだと私たちには見えるかも

7) 『魂の旅について』（二周忌の歌）244-6. これ以前にも引用されることがあるが、スティールがここで引用したことで、この作品は18世紀にある種の評価が与えられたと考えられる。フィールディングの『トムジョーンズ』（1749）4章2節にもこの箇所が引用されている。

1) 『書簡詩』2.1.202-7.

2) 『詩学』14.1-3.

知れないのです。私自身は、ある人物がそのような巨大な羽飾りを付けて不平を言っている場面に接すると、彼を悲嘆に暮れた主人公というよりはむしろ不幸な狂人と見てしまいそうです。こういった頭上の不必要な装飾が偉大な人物を創るので、王妃は普通長い裾の例の補助的な邪魔物を着用することで壮観さを獲得することになります。つまり、私が言いたいのは、動きにつれてゾロゾロと床を掃くもすそのことなのです。もすそを上手く広げたりするには、常時、少年がひとり必要です。この光景を見てほかの人たちがどんな感じを持つのかは私には分かりませんが、正直言って、私の目は小姓にとらわれてしまいます。そして、王妃が舞台上をあちこち歩き回るとき、もすそにつまずかないかとか邪魔にならないかということが気にかかって、王妃のしゃべることにはさほど注意が向かないのです。私の考えでは、王妃がぎこちない動きをしながら思いの丈を口にし、小姓がその間中王妃のガウンの裾がしわにならないよう気を配っているのを見るのは、とても奇異な光景です。二人が同時に舞台に登場する場面はとても異常です。すなわち、王妃は父親の王の不興を買うあるいは恋人の主人公を失うのではないかと危惧し、その一方で、小姓はもっぱら王妃がペティコートの中で足をからませないかと心配している訳です。

ある古典作家³⁾は、追放された王や悲嘆に暮れる主人公に対する観客の憐憫を誘うために、役者にみすばらしい擦り切れた衣裳を着せたということです。私たちに、舞台に登場する人物の崇高な考えを吹き込むために行う憐憫を誘うこういったやり方は、いま述べてきたやり方と同様に、間違っていると思われます。要するに、私は、ローブの裾や羽飾りによるのではなく、威厳のある考えや荘厳な表現から恐怖や憐憫を喚起させて欲しいのです。

偉大な人物を創造し、王や女王に威厳を添えるもうひとつの機械的な方法は、彼らに鉾槍や戦斧を持たせることです。⁴⁾我が国の舞台では、ろうそくの火消し役二名と大道具方二、三名で衛兵の役をこなします。⁵⁾そしてこれに赤いコートを着た運搬人二、三名を加えて、大勢の軍団に相当させることになります。私は時々双方の軍隊が舞台上で鉢合わせしたのを見たことがあります。詩人はそこで双方の将軍に敬意を表わす意向だったのです。読者の想像力では、そういった大勢の中にさらに二十名増やしたり、二十万から三十万の兵が四十から五十ヤードの空間で戦っているのを想定することは不可能です。この種の出来事は具体的に演じさせるのではなく、語ればよいのです。

さらに、舞台に載せるには相応しくないことがあります。

分別のある人なら、そんなことは語るに留めるでしょう。⁶⁾

3) ロスコモンはホラティウスの『詩の技法』への注で、アイスキュロスがエウリピデスに「あなたは憐憫を誘うために王にぼろをまとわせる」と言うアリストファネスの『カエル』を引用している。

4) そのほかに、各種の剣、鉾槍、牧羊者の杖、枢機卿のかぶる緋色の帽子、ターバン、ドラム、薬壺などがある。

5) 『リハーサル』5幕1場で、ベイズは「私は戦闘の場面は二人で済ませます。それ以上人を使いません。でも、とても迫真的なので、あなたはきっと1万人が加わっているものと思うことでしょう」と語っている。

それゆえ、この件では、我が同胞にフランスの舞台の例を挙げておきます。フランスでは、王や女王はいつもお付き無しで登場し、衛兵は舞台裏に残しておくのです。同様に、フランスを見習って、我が国の舞台からドラムやトランペットの音、そして歓呼の声を追放してもらえると有り難いものです。こういった音は時としてとても強烈で、ヘイマーケット劇場⁷⁾で戦闘のシーンがある場合には、その物音がチャリングクロスまで届くくらいなのです。

本日の紙面では、悲劇の人物を大きく見せるために用いられる以上の点だけに触れ、通俗な作家が観客に恐怖や憐憫や称賛を呼び起こすために実行しているその他の方便については後日の紙面に譲ることにします。

悲劇の成功には、しばしば詩人よりも洋服屋や画家の方が貢献しています。道具立ては台詞と同じくらい普通の人たちを感動させます。そこで、役者たちは、内容の出来の良い作品もさることながら、衣裳の素晴らしい作品が大勢の観客を呼ぶのだということがよく分かっています。イタリア人は見掛けで観客につけているこのやり方に対してとても巧みな言い方をします。つまり、彼らはこれを「演劇における不埒でずるい要素」と言います。だが、悲劇の見掛けがどれほど俗受けしようとも、分別のある観客はすぐさまそれを見抜き、見下します。

優秀な詩人なら、読者に、実際に騎兵大隊や歩兵大隊が整列し、大混乱の戦いに巻き込まれるのを見るよりももっと真に迫った軍隊や戦闘の描写を提供するでしょう。私たちの心は荘厳な考えを快く受け入れるのであって、役者の見かけよりもしゃべる内容によって、荘厳な感情が燃え上がるものなのです。王すなわち主人公にいくら素晴らしい衣裳を着け、供回りを付けても、ブルータスにシェイクスピアの二、三行から受ける半分の壮観さも威厳も与えることはできません。

第43号 1711年4月19日(木曜日)

【スティーラー】

平和を望み、戦争を望む。それぞれ堂々と。

誇り高き人を服従させ、足かせをはめられた奴隷を解放する。

これは尊大なことだ。有徳の士よ。(ウェルギリウス)¹⁾

手に仕事がないのを最大の不幸としている人たちが大勢います。こういった人たちは絶えず何か務めつまりやることがないと駄目なのです。私たちは普通こういった人のことを物憂げな人物と言います。すなわち、何もすることがない人物は、好奇心というよりはむしろある種のぼんや

6) ホラティウス『詩の技法』182-4.

7) 1710年11月20日以降、ヘイマーケット劇場はオペラ専用だったので、アディソンのこの記述はドゥルーリー・レイン劇場の悲劇のことだろう。うっかりミスでなかったとすれば、随分早い時期に書かれたものかも知れない。

1) 『アイネーイス』6.852-3.

りとした思いから、始終、自分には相応しくないことにちょっかいを出しているのです。彼らがどんな人物であるかを知るには、ある紳士からの手紙をご紹介するのに勝る方法はありません。この紳士はこの種の階級に属し、オックスフォードの方です。

オックスフォード、1711年4月13日

午前4時

拝啓

貴殿の最近の考察²⁾を読んでいまして、クラブの由来についての簡単な説明があるのに気づきました。私には、貴殿が少々馬鹿げた見方をしていらっしゃるように思えます。私はその件について十分考察し、そういった集まりでこそ、最も重要な交渉がうまく運ぶのだと考えています。それゆえ、貴殿と私は同じように関心を持っていると信じていますが、人々のために、模範となるようなクラブの設立を提案したいと思います。

正直言って、目的や内容がつまらないクラブが多すぎ、明らかに、国家つまり国民の安寧にとって全く取るに足らない存在になっているのは事実です。その件につきましては貴殿にお任せします。でもその場合、貴殿には当方の考えます企画ほど有益かつ賞賛に足るものはないのだということをお認め戴かなくてはなりません。間違った名で呼ばれたり、ひやかしを避けるために、当方では「週刊会合」と名づけることにします。会長の任期は少なくとも一年で、場合によっては四年ないし五年継続することがあります。会員は全員、それぞれ、謹厳で、思慮深く、洞察力があります。ローマの執政官には絶大な権限が認められており、ローマを守ることになっていたのですが、私たちは力の及ぶ限り、当クラブに危害を加えないように注意を払いながら、私たちの意に染まない主義や事実、人物あるいは事物を非難することを私たちの義務と考えています。国家の安寧をはかり、戦争は私たちが相応しいと考えるやり方で、外国で遂行させることを私たちの務めとします。もし誰かが私たちと同意見でない場合は、仕方ありません。ほっておくしかありません。さらに、私たちは、時折、身をおとしてある程度私たちの大学事情についてお伝えします。

観察者殿、実は私たちはフランスワイン輸入条例³⁾に大層憤慨しております。誠実なジョージ亭での上質でためになるポルトガルワイン⁴⁾が一、二本あれば、楽しい夕べを送り、よそよそしさを吹き飛ばすことが出来たのです。ところが、このしゃくにさわるフランスワインは高くつくだけでなく、私たちのためにもならないのです。もし手遅れにならない内に気づいていたら、その件

2) 第9号、第17号、第24号、第30号、第32号参照。

3) この議案は3月10日に第三読会にかけられ、193対68で通過した(下院議事録16.543)。その後、3月16日に上院で受理された(政治報告書1711年4月)。

4) 1703年のメシュエン条約によって、イングランドはフランスワインの3分の1の関税でポルトガルワインを輸入することになっていた。

ではきつと請願していたことでしょう。でも、これもやり過ごすことにしましょう。

そしてまた、北国の君主⁵⁾ならびに異端者共の件は明らかに私たちの好意と意向に反しているとみなしているとお伝えしておかなくてはなりません。それはとても危険な新機軸のバルムキスト殿下⁶⁾の存在にもかかわらずそうなのです。私たちは決してその真相を究めていない人がいると思っている訳ではないのです。洞察力に優れた友人が言うように、私の私信をお読み戴ければ、少なくとも私にはこの種の事情に精通した経世家になれる資質があるということです。

ハンガリー⁷⁾の不平分子の件はこれでやっと決着がつき、平和が訪れるだろうと私たちは考えています。

中立軍、フランドル軍、あるいはその他二、三の君主がどんな行動をとるべきかはまだ十分に決っていません。そこで、私たちは我慢強くつぎのダイアー⁸⁾の回報が手元に届くのを待っています。ご承知のことと思いますが、ダイアーこそ私たちの信頼すべき情報源であり、政治におけるアリストテレス的存在なのです。まさしく、最後の頼みの綱であり、論争に終止符を打つ確かな決め手なのです。

最近、訓練を受けた勇敢な一団が夜通しロンドンをパトロールしていたのだという情報を入手しました。実は、私たちにはその必要性が想像出来ませんでした。そんなことは事前には思いもよらず、真偽のほどは何一つ知りませんでした。私たちは商人とかその徒弟が休日にパトロールするなんてことはとうていありえないことだと考えていました。ところが、ダイアーがそれには前向きな考えを持っており、また経緯を知っている人たちから話を聞いたことのある人たちからの手紙でもそれを支持していることが分かりましたので、その一件を調査するように指示されている委員会の委員長は、それはありうることであり、一理あるのだという委員会報告を出しました。ほかにもお伝えしたいことは色々ありますが、いま、ドミニクスとスライブーツという私の

5) スウェーデンのカール12世は、1709年7月ポルタヴァの戦いでピョートル大帝率いるロシア軍に敗れ、ベンダー（現在のベッサラビア、ティギナ）に亡命しており、その成り行きに関しては、当時の新聞にさかんに採り上げられた。

6) バルムキストはカール12世の特命全権公使で、ネーデルランド諸州に派遣された。1711年2月15日付けロンドン・ガゼット紙はハーグからのつぎの速報を掲載した：「同盟国側大臣たちはスウェーデン公使バルムキストに北部の中立を維持するための新構想を伝える。これを受けて、ベンダーに亡命中の国王とスウェーデン議会にそれぞれ急使を派遣。」

7) 5月9日、ウィーンからの速報によると、「不満分子たちとの和解が成立したことでウィーンは喜びに沸く。ハンガリー王国とトランシルヴァニア公国は再びハプスブルク家の支配下に入り平和が訪れた。これによって、国はさらに強くかつ豊かになり、ウィーンならびに全土の住民は大いに安堵することだろう」（1711年5月17日デイリー・クーラント）。

8) ジョン・ダイアーが手書きに似たタイプで発行する『時事回報』は、サー・ロジャー・ド・カヴァリーたちトーリー支持者たちに人気があった。アディソンの『ドラマー』で、ウェラムは「主人の訃報がダイアーの回報にはじめて載ったので」主人は存命であると信じている。「全国の狐狩りをする人たちみんなから我が国最大の経世家とみなされているダイアー氏」（タトラ第18号）は1713年9月6日に逝去し、回報はこの時点で途絶えた。

友人であり同僚がやって来まして、コーヒーも入ったようです。

敬具

エイブラハム・フロス⁹⁾

こういった人たちの心の動きが、何事であれ、満足感をもたらすものではなく、ひとえに物珍しきに向かうのだということがお分かり戴けるでしょう。彼らにとっては、何事であれ、確実にすることはつまらないことなのです。なぜなら、確実にになってしまうと彼らは当惑し、探求心に終止符を打つことになるからです。物憂げな人たちが探求するのは、知識のためではなく頭の運動のためなのです。よくは分かりませんが、これは私たちがよく見掛けること、つまり、物憂げな人はとても優秀な実務家だということを説明する優れた方法なのかも知れません。実務に関わることで、彼らにはやるべきことが与えられ、持ち前の重苦しさが軽減されるのです。ところが、移り気な人にとっての実務は、自分たちの真の存在を認識したり、幸福感を獲得する妨げとなります。物憂げな人たちは楽しみでは害はありませんが、こういった人たちは普通埋め合わせをするために、自分たちの欲求を目立たせるようなことに着手しますので、彼らには暇な時間がない方が望ましいのです。物憂げな人で優れた教育を受けている人は珍しいですが、たまたま暇を持て余している場合には、こういった人はとんでもないことに、政治か詩のどちらかに関心を寄せます。一般に、物憂げな人たち全員の研究対象となるのは政治です。だが、敏感な人物に物憂げな気持が宿る場合には、通常、その力は詩に発揮されます。ここで、愚鈍な頭が機敏な心によって刺激を受けるという理由から、その時代の人々に大きな楽しみを与える二、三の軍事作家のことに触れてもいいかも知れません。こういった物憂げな人の体質は無意味なことに活力を与え、そうでなければよどんでしまう水溜まりを沸き立たせます。チャールズ二世の治世に書かれ、当時の才人たちから正当に無比の作品と評価された例の名高い詩『イギリスの王子』¹⁰⁾は、いま語っている愉快な才能が生み出したものです。数ある二行連句の中から、ここではやはり、つぎの二行を引用せざるを得ません。

ヴォルテガー王子は色鮮やかなベストを身につけた。

祖父が裸のピクト人から獲得したものだ。

この場合、もし詩人が愚鈍で陽気でなかったら、無意味なことに対する興奮と性急さから、ヴォルテガー王子も祖父も裸の人から胴衣を剥ぎ取ることは出来ないのだということを失念することはありえなかったことでしょう。ところが、冷静な資質を備えた人物なら、ピクト人の皮膚を剥

9) エイブラハム・フロスは1692年以降ユニヴァーシティ・コレッジの学寮長をしていたアーサー・チャーレット博士(1655-1726)のこと。ドミニクスは1702年にオールソウルズ・コレッジの舎監に選出されたバーナード・ガーディナー博士(1668-1726)のことで、1712年から15年まで副総長を務めた。スライプーツはクウィーンズ・コレッジの学寮長で、1706年から10年まで副総長を務めたウィリアム・ランカスター博士(1650-1717)のこと。

10) エドワード・ハワードが1669年に出版した英雄詩。

ぎ取り、それで征服者に着せるためのバフ（もみ革）を作っていたことでしょう。

こういった所見を生活にとって何か有益なものにするために私が提案することは、私たちはすべての人が手仕事を何か修得している聡明な国民を手本にしたということです。絶えずかぎタバコ入れをいじっていないで、手仕事に少しでもその時間を割くようにすれば、伊達男にはそれだけでも十分やるべきことが与えられることになるのです。このやり方はすべての人に何かができるようにすることで、大いに国民の利益に貢献することになります。なぜなら、社交界の一員でなくても、指輪の銘を書いたという功績で、ウィル・コーヒーハウスにやって来る人物のように、社交界に出入りする何らかの口実になるでしょうから。

第44号 1711年4月20日（火曜日）

【アディソン】

さあ、私だけでなくみんなが期待していることに耳を傾けなさい。（ホラティウス）¹⁾

詩人が観客の心を恐怖で満たすために実践しているいくつかの技巧の中で、最初に目に付くものは、当然、雷と稲妻でしょう。神の降臨、亡霊の出現、悪魔の退場、あるいは暴君の死などの場面ではこの技巧がよく使われます。悲劇で鐘²⁾が効果的に採り入れられている例をいくつか私は知っています。そして、観客全員が鐘が鳴っている間ずっと非常に緊張しているのを見掛けたことがあります。だが、特に血まみれのシャツを着て登場するときの亡霊ほど、我が国の観客を喜ばせかつ恐怖を起こさせるものはありません。かりに亡霊が舞台をそっと横切ったり、裂け目に姿を見せ、一言も発せず姿を消すだけであっても、そのお陰で芝居がしばしば生き返ることがあります。こういった恐怖にはそれに相応しい季節があるかも知れません。恐怖の役割が詩人にとっての単なる補助的手段に限られている場合には、受け入れられるだけでなく、是認されることなのです。例えば、『安泰を保ったヴェニス』の時計の音³⁾は全観客の心を震え上がらせ、言葉で伝えられるよりももっと強い恐怖を植え付けます。『ハムレット』における亡霊の登場は、この種の傑作であり、注意力あるいは恐怖心を引き起こす状況で用意されています。読者は亡霊が登場する前のやりとりによって、実に見事に亡霊を受け入れる心積もりができています。亡霊が初めて登場したときに何も語らなかったことで、否応なく想像力は高められ、亡霊が登場して来るたびに、さらに一層恐怖心が煽られているのです。王子ハムレットが亡霊に近づいて語り掛けるつぎの台詞を不安でやきもきしないで読める人は誰がいるのでしょうか。

1) 『詩の技法』153.

2) ポープは『ダンシアッド』(1729)の中で、「吊鐘」について「哀れを誘うための機械的な補助手段で、現代の悲劇作家にとっては珍しいことではない」と述べている。

3) 5幕、ジャフェアとベルヴィデラの別れの場面でピエールの死を報じる鐘が鳴る。

ホレイショー：ああ、ハムレット様、出ました。

ハムレット：どうか神の御加護を！

お前は善霊かそれとも悪霊か、
周りに漂うのは、天界の霊気かそれとも地獄の毒気か、
姿を見せたのは、悪意からなのかそれとも善意からなのか、
問いかけを待っているかのような姿で現れた以上、
俺は語りかけるぞ。ハムレット！国王！父上！
さあ、答えてくれ、そして本当のところを語ってくれ。
柩におさめられ、聖者の列に加えられたはずの死者が、
どうして死の衣を破って出て来たのだ。
どうして、静かに埋葬されるのを見届けた墓石が
重い大理石の口を開いて、死者を吐き出したのか。
何があったというのだ、死者が再び全身に鎧をまとい、
雲間を洩れる月明かりの中に現れ、恐怖に包むとは。⁴⁾

こういった次第ですので、巧みに採り入れられ、作品中にそれに釣り合った感情や表現がある場合には、私はこういった技巧を非難するものではありません。

憐憫を喚起する主要な小道具は、ハンカチです。実際、我が国のありふれた悲劇では、悲嘆に暮れる人物を描く場合、九分九厘、ハンカチを目元に当てます。舞台からこの悲しみの小道具を追放する気は私には全くありません。すなわち、悲劇にはハンカチが付き物だということは私には分かっているのです。私が言いたいのは、濫用を避けて欲しいということだけなのです。要するに、役者の舌と目を一致させて欲しい訳なのです。

子供を連れたわびしい母親⁵⁾はしばしば観客の憐憫を集めます。そこで、このやり方はいくつかの悲劇で、しかるべき地位を占めています。他の作品でこの方法が取られているのを知っている今日のある作家は、悲嘆を倍加させ観客に従来の作品の二倍の感動を与えようとして、片手に幼い男の子、もう一方の手に女の子を引き連れた王妃を舞台に載せました。これもまた実に効果的でした。また別の詩人は、二、三年前、先人よりも優れた作品を書こうとして、子供を三人採用して大成功しました。ところで、私の耳にしたことによりますと、この上なく冷たい人たちをも悲嘆に暮れさせようと考えたある若い紳士が悲劇を書いたそうです。その作品では最初に登場する人物は、父親をなくした子供を六人連れ、悲しみに沈んだ喪服を着た未亡人なのです。これではまるで、しばしば見掛ける博愛者にまわりつく子供のように見えてしまいます。このように、

4)『ハムレット』1幕4場38-54行。

5) おそらくドライデンの『愛ゆえに』の3幕で、オクタヴィアがアントニーの二人の幼い娘を連れて登場する場面のことをほのめかしているのだろう。

優秀な作家ではうまくいくことでも、下手な作家の手にかかるとおかしなことになってしまいます。

しかし、憐憫や恐怖を喚起させる方法の中で、我が国の舞台でしばしば見られるおぞましい殺し合いほど、馬鹿げてかつ野蛮で、我が近隣の人たちの軽蔑と嘲笑を引き起こすものではありません。刺し殺されたり、毒殺されたり、拷問台にかけられたり、串刺しにされたりするのを見て喜ぶのは、確かに残酷な気質の現れと言えます。これはイギリス人観客の眼前でよく実行されますので、イギリス人には心地よい見世物なのだと考えている何名かのフランス人批評家たち⁶⁾は、これに乗じて、イギリス人は血を喜ぶ国民だと指摘しています。事実、悲劇の最終場面で、舞台上に死体がゴロゴロころがっているのを見るのは、そして、劇場の衣裳部屋に、各種の短剣や刑車や毒入れやその他数多くの死の道具があるのはとても奇妙です。フランスの劇場では殺人や処刑は常に舞台裏で行われます。礼儀正しく文明化された国民の行儀作法にとっては、このやり方は非常に心地よいものです。とはいえ、フランスの舞台でも例外がない訳ではなく、非難を受けるに値するほど馬鹿げたことをやる場合があります。オラッティとキュリアッティのテーマを扱ったコルネイユの有名な作品⁷⁾では、つぎつぎとキュリアッティを打ち負かして来た激しい気性の若い主人公が、妹から勝利の祝福を受けるかわりに、恋人を殺害したことを叱責されて、激情と怒りに駆られて妹を殺害する場面があるのを私は記憶しています。もし何らかでそういった残忍な行為を軽減することが出来るとすれば、それは自然、理性あるいは人間性の感情が宿らない内に、突然片付けてしまうことでしょう。しかしながらこの場合、人前での流血の惨事を避けるために、激情に駆られたらすぐに、舞台にいる間はずっと妹を見守り、二人が舞台から消えるまで、殺人をしないでおくのです。もし、彼が観客の観ているところで妹を殺害していたら、作品の品位は随分落ちていたと言わざるを得ません。しかし、実情は、とても不自然であり、まるで平然と人殺しをしたように見えます。この件についての私の考えはどうかと言いますと、大切なのは、可能であれば演ずるのではなく、語って済ませた方が望ましいということです。

これと似た微妙な状況におけるソフォクレスの悲劇の処理の仕方を見ると、読者は納得し難いかも知れません。オレステースは、母親が父親を殺害し姦夫と共謀して王国を乗っ取っており、シェイクスピアのハムレットと同じ情況⁸⁾だったのです。そこで、若き王子は、王座に就いている

6) ラパンの指摘であり、スティー爾もタトラー第134号で、「我が国の悲劇の人前で殺しを見せるやり方には、何かぞっとする点があることを認めざるを得ない。他国では舞台裏で行なわれる刺殺とか毒殺は、我が国では観客を喜ばすために公然と行なわれるのだ」と述べている。ミソンも同趣旨のことを指摘している。

7) 『ホラティウス』(1640)。

8) ロウは1709年の『全集』の序文の「シェイクスピアの生涯について」の中でオレステースとハムレットについて同様の比較をしている。クリュタイムネストラの舞台裏での死は、しばしば古典的「規則」の例示として引用される。事実、ソフォクレスの『エレクトラ』では、クリュタイムネストラが父に慈悲をかけなかったと言うのはオレステースではなくエレクトラなのである。

連中に父の死の復讐を決意します。そして、見事な策を立てて、母を殺害しようと母の私室に潜入します。だが、この光景は観客にあまりにも衝撃的と考えられたため、この恐ろしい決意は舞台裏で果たされるのです。息子に慈悲を求める母親の叫び声が聞こえ、母こそ父に慈悲をかけなかったではないかという息子の返答が聞こえて来ます。その後で、刺されたとの彼女の悲鳴が聞こえ、彼女が殺害されたと分かります。古典作家の作品にはこの種の事例がほかにもありますが、我が国の作品では舞台裏で台詞が発せられる例を私は知りません。舞台裏で交わされるこの恐ろしい母と息子の対話には、観客の眼前で繰り広げられる何ものにもまして限りなく痛ましい何かがあるという私の意見に、読者も賛同なさることと思います。オレステースはその直後、宮殿の入口で篡奪者に会います。ソフォクレスのととても巧みな考えから、オレステースは篡奪者には片を付けるまでしばらく苦しむがいいと言って、宮殿の父が殺害された部屋に引きこもっておれと命じて、その場では殺害が行われません。オレステースは人殺しが行なわれたまさにその部屋での復讐を考えたのです。こうすることで、ソフォクレスは、その後ホラティウスが観客の前では親殺しや不自然な殺害は控えるようにとの規則によって確立した品位を保っているのです。

メーディアに死を招くナイフを抜かせ、

舞台に子供たちの血を流させてはならない。⁹⁾

そこでフランス人はホラティウスの規則に大きく手を入れました。彼らが舞台からの追放を考えたのは、あらゆる種類の死ではなく、あまりにも大きな恐怖を引き起こし、舞台裏で処理された方が観客に効果的な死に限りしました。それゆえ、私は我が同胞に、観客により大きな効果をもたらす場合には、出来るだけ人前で処刑を控え、舞台裏で実行する方法を選んだ古典作家のやり方を手本にするよう助言します。とはいえ、それ自体一般に馬鹿げているのですが、悲劇中の忠実な人物は観客の眼前ではめったに殺されることはなかったのですが、その遺体はしばしば死後呈示され、常に物悲しくあるいは恐怖を引き起こすものだったのだと言っておかなくてはなりません。そういう訳で、舞台上の殺人は品位を落とす場合、またありえない場合にだけ避けられたのではなかったようです。

メーディアは死を招くナイフを抜いてはならず、

また、アトレウスも恐ろしい宴を準備してはならない。

カドモスとプローニュの変身。

(彼女はツバメに、彼はヘビに変身した)

私の感性に反することは何でも、

見るのが嫌だし、信ずることは出来ない。¹⁰⁾

9) ホラティウス『詩の技法』185.

10) メーディアのことはエウリピデスの作品の中でのこと。ギリシャ伝説では、アトレウスは弟テュエステースの子供たちを殺害し、その肉を弟に食べさせた。カドモスとプローニュについてはオヴィディウス『変身物語』4.576と6.668を参照。

無知な詩人が場ふさぎのために、また巧みな詩人がより素晴らしい悲劇のために利用するいくつかの劇的な工夫について考察しました。完全に排除して欲しいものもありますし、中には慎重に利用して欲しいものもあります。同じ観点から喜劇について考察し、笑いを喚起するために陳腐な才能の持ち主が実践している数知れない手段について述べることは、果てしない作業となることでしょう。短いコートを着たブロックと長いコートを着たノリスの二人組¹¹⁾はめったに失敗しません。通常の喜劇では、つばの広い帽子と狭い帽子とでは、かぶる人が違います。場の機知が肩帯にあるときもあれば、頬ひげにある場合もあります。樽から顔を出して舞台を走り回る恋する人¹²⁾は、チャールズ二世の時代にはとっておきのお笑いネタと考えられ、当時の第一級の才人によって採り上げられました。しかし、馬鹿馬鹿しさは憐憫ほど微妙ではなく、また笑いを呼ぶものは泣かせるものに比べて数限りなくありますので、悲劇的技巧に比べて喜劇的技巧にははるかに幅があり、その結果、大目に見られるのです。

第45号 1711年4月21日（土曜日）

【アディソン】

かの国の人たちは役者だ。(ユヴェナリス)¹⁾

私は和平には色々不幸な結果が伴うことをとても心配していますが、その一方で、安全で光栄ある和平²⁾ほど望ましいものはほかにはないと考えています。私の言いたいのは、政治のことではなく、行儀作法のことなのです。リボンやブロードがこれから先どれだけ氾濫したら気が済むのでしょうか。哄笑と無礼にどれだけさらされたら気が済むのでしょうか。私は、このような際立った悪弊をくいとめるために、「フランス式気取り」³⁾の輸入を禁止する議会条例があればいいと心から願っています。

長引く戦争のために（悪にもかならず少なからず善が伴うものですが）、かなり摩滅し忘れられてはいますが、我が国の女性たちはこれまでこの滑稽な国民から非常に強い影響を受けていたことがあります。良家の女性の中に従者を抱えている人がいた時代があったのを私は覚えています。確かに、女性よりも男性の方がはるかに使い易かったのでしょうか。私自身、男性の「腰元」が姿

11) ウィリアム・ブロック (c.1657-c.1740) とヘンリー・ノリス (1665-c.1730) は共に喜劇役者で、よく共演した。

12) ジョージ・エサリッジ (1636-92) 『喜劇的な復讐、またの名を桶の中の恋』 (1663)。

1) 『諷刺』 3.100.

2) 和平の予備行為は翌年秋まで明らかにされなかったが、トリー政府はすでに敵側と秘密交渉を行っており、今では、とりわけ4月17日に若き皇帝ヨーゼフ1世が死去後は和平の噂が流布していた。

3) 当時の社交界へのフランスの事物の流行に関しては、シャルランヌ『18世紀イギリスへのフランスの影響』 (1906) 参照。

見を手にして部屋の中を動き回り、朝の内ずっと婦人の髪に櫛をかけているを見たことがあります。ある婦人が従者の子供を孕んだという話の真偽のほどは私には分かりませんが、現在は我が国では、この手の人種は絶滅していると思います。

男性がこの種の仕事に就いていたころには、ご婦人方もベッドで訪問を受けるという流儀⁴⁾をはやせました。当時、女性は忙しくありませんでしたので、男性と会うのを拒絶するのは無作法だとみなされました。ごちない言い訳をするポーターでは適當ではないと考えられたのです。私はなにごとにつけ珍しいものを見るのが好きですので、かつて友人のウィル・ハニコームを説得してこういった見聞の広いご婦人のところへ連れて行ってもらったことがあります。同時に、ウィルには、会話に加わる必要がないように、私を英語がしゃべれない外国人として紹介して欲しいと頼みました。そのご婦人は、略装で客人を迎えていると思われたがっていました。私たちの訪問を受けるために最高の装いをし、化粧をしていました。さっと羽織ったナイトガウンについた皺はわざとらしく、髪の毛は実にうまく乱れているように見えました。私としましては、女性のあらゆる点が無作法に見えたことに衝撃を覚え、彼女がベッドに移動したときには彼女から目をそらさざるを得ませんでした。彼女が足や手を動かすたびにとても狼狽した訳です。この習慣を採り入れた男たらしちは年を取るにつれて、六十歳の女性ならなにもフランス人の物真似をしなくても存分にあしらえるのだと知って、徐々にその習慣を止めました。

現在のところ、センプローニア⁵⁾が最も公然としたフランス崇拝者ですが、その彼女でさえ非常に慎ましく、来訪者を化粧室より奥へは入れません。彼女が肩に長い髪をなびかせながら政治の話をし、また顔を鏡に映して見ているときの光景はとても奇異なものです。この光景が周囲の男性たち全員を魅了する訳です。彼女は女性と来訪者への話を実に見事に使い分けます。彼女はオペラあるいは説教から象牙の櫛あるいは針山へと実にさりと話題を移行させます。私は彼女が従僕にことづけをするために、それまでしていた旅行の話を中断したときの様子、そしてまた道徳について話している最中に、つけぼくろ⁶⁾のことに触れて、道徳の話を中断した様子を見てとても愉快に思ったことです。

陽気と移り気ほど女性を危険にさらすものではありません。これは大半の女性にとって自然なことです。そこで、この快活さがはしたない行為にならないように心掛けることが、すべての聡明

4) 朝方婦人の寝室つまり閨房を訪れるという習慣は、洒落者たちの気取りのひとつだった。これは17世紀フランスの上流社会で流行した。ウィル・ハニコームは自らを閨房の人と称している(第530号)。

5) サルスティウス(c.86-c.34 B.C.)によると、センプローニアはダヌスが実に得意で、多くの男を手玉に取った女性であったという。

6) ミソンはイギリスとフランスのつけぼくろの使用について、「つけぼくろはフランスの婦人には知られていないが、これをつけると若く奇麗に見えるに違いない。イングランドでは、老若、美醜を問わず、みんなつけぼくろを付けており、ボロボロになるまで使用している。70歳を越す醜い老婆の浅黒く皺のよった顔に15ないしそれ以上のつけぼくろが付いているのをしばしば見掛ける。このようにして、イギリスの婦人は我が国の流行にさらに磨きを掛けるのだ」と述べている。

で徳高い女性の関心事となるべきです。一方、フランス人の談話や振る舞いはすべて、美德あるいは思慮深さと矛盾しない形で、女性をより魅力的にし、(フランス人の好きな言い方をすれば)「より覚醒」させることに寄与しなくてはなりません。人前で大きな声でしゃべること、内々であるいは小声でしゃべるようなことをみんなに聞こえるようにすることは、洗練された教育の一部とみなされています。同時に、赤面は当世風ではなく、しゃべる内容のいかんにかかわらず沈黙の方が無作法なのです。要するに、すべての時代および国において女性の最高の装飾とみなされて来た思慮深さと謙虚さは、話題の少なさの証拠であり家族向きの振る舞いと考えられている訳です。

数年前、私が『マクベス』⁷⁾を観に入ったとき、不運にも、席が今は亡くなっていますがある貴婦人の下でした。彼女の騒々しさから判断するに、彼女はフランスから帰って来て間も無かったようでした。彼女は、開幕直前に、独白調で「例の魔女たちはいつ登場するのかしら」⁸⁾と大声を出しました。そして、魔女が姿を現すとすぐに、右手三つ先のボックス席の婦人に向かって、あの魔女どう思われますと声を掛けました。その少し後、ベタートンがこの作品の中でも最も素晴らしい台詞を語るとき、左手のはるか離れたところにいる別の婦人に向かって扇を振りかざしながら、一階席全員に聞こえるような低い声で、今夜はバロン⁹⁾の出番はないに違いないわと話し掛けました。その後間もなく、私の三列前の席に座っている若い准男爵の名前を呼んで、マクベス夫人はまだ生きてるのかしらと尋ね、(彼が返事をしないうちに)バンクオーの話に移りました。この頃には、彼女への観客が少なからず出来ており、全神経が彼女に向いている人たちがいました。私は芝居が観たかったので、彼女の無礼な言動が行き届く圏内から逃げ出し、一階席の彼女から最も遠い場所に席を移しました。

このひどく子供っぽい振る舞いは、こびを示す手段として最も手の込んだもののひとつであり、見聞を広めて自己を向上させようとする気持のないご婦人方にはなかなか獲得できるものではありません。自然でのびのびとした振る舞いにはとても心地よいものがありますので、人々がそれを獲得しようと努力するのは無理のないことです。とはいえ、そういった気性が生まれつき備わっていない場合には、身につけるのはとても難しく、そんなことを試みると、おうおうにして滑稽なことになってしまうものです。

ある聡明なフランスの著者¹⁰⁾によると、フランス宮廷のご婦人方は、その当時、難解な言葉を

7) マクベスはベタートン(トマス・ベタートン、1635-1710)晩年の持ち役のひとつ。彼は1707年12月27日、29日、1708年1月10日、1709年12月17日にヘイマーケット劇場で、そして、1708年4月24日、10月16日、1709年1月6日、5月20日にはドゥルーリー・レイン劇場でそれぞれマクベスを演じた。1710年4月28日死去。スティールはタトラ第167号(1710.5.4)で、彼の演技、特にシェイクスピアものの演技力を称賛している。

8) ドゥルーリー・レイン劇場での上演では、魔女役はノリス、ブロック、ボウエンが務めるのが習わしだった。

9) バロンはフランスのダンサーで、しばらくロンドンで公演していた。

そのまま口にするのは育ちの悪さであり、一種の女性による銜学だと考えたそうです。そのため、ご婦人方はしばしば難解な言葉を用いる機会を作り、その言葉を用いないことで礼儀正しさを示したということです。さらに彼は、宮廷で、ある身分の高いご婦人が、きちんとした場所で難解な言葉を偶然使用することになったとき、まともにその言葉を口にし、周りの人たち全員が、彼女のことを思って狼狽したと付け加えています。

しかしながら、公正を期するために言いますと、数限りなく旅をしているご婦人でも悪影響を受けず、帰国時も出国時と変わらず、謙虚さと思慮深さと分別を失っていない人も大勢いることは認めなくてはなりません。一方、ずっとロンドンの煤煙の中で暮らしていても見聞を広めているご婦人も数多くいます。セント・ジェームズの教区から一步も出たことがなくても、馬車の中で、ヨーロッパの諸国を半分周ってはじめてかき集めることができるほど色々と外国のあさはかな行いを示すある女性を私は知っているのです。

-
- 10) ラ・ブリュイエール『性格論』参照。スティールは『婦人の書斎』の中のある一節で、フェヌロンの『娘の教育』を引用して、昨今の女性がつづりがまともに書けないこと、そして発音が出来ないことについて、「聡明で上品な女性があたりまえの教育の基礎をおろそかにしているさまを目にするのは嘆かわしいことだ。発音の仕方を知らずしとやかに読めないとすれば、読書内容を理解するのでやっとなのだ。」と語っている。